

本発表では、最澄は自らを天台大師の後身と自認したが故に、その生涯は靈山同聴の天台大師の教法を敷衍する如来使としての生涯であったことを検証してゆきたい。

最澄の生涯を通観してみると、仏出世本懐の經である法華經の流通を目的とし、その教化流通を生涯の使命とした「如来使」としての自覚と行動が見えてくる。その意味で、「我が滅度の後に、能く竊に一人の為に法華經の乃至一句を説かん。当に知るべし。是の人は則ち如来の使なり。如来に遣わされて、如来の事を行ずるなり。」という法華經の一文は、最澄の生涯を通じた行動規範であったと理解される。

無論、靈山同聴たる昔日の法華經聽聞衆である南岳慧思と天台智顛の両大師を法華經流通の使命を帯びた「如来使」とみるのは当然であり、その両祖師を慕う最澄の言動は自著の端々に表れている。更には、海東日本における法華經の最初の本格的な弘通者とされる聖徳太子も、「南岳慧思禪師の生れ変わり」という思潮も手伝って、「慧思＝如来使」は、「如来使＝聖徳太子」の構図に及んでいる。

しかし、聖徳太子の場合、最澄は『内証仏法相承血脈譜』の「靈山同聴・直授相承」という天台法華宗相承系譜にこそ載せないが、太子は南岳の後身、法華經弘通の如来使というこの二点から特に重視尊重するのである。

最澄にとって如来使の自覚は、入唐中の天台山仏隴寺行滿座主からの伝法・經典授受の際に、自らを天台大師の後身と承知した時に始まるとみてよかろう。以後、「南岳慧思禪師(靈山同聴・直授相承・如来使)＝天台大師(靈山同聴・直授相承・如来使)＝最澄(天台大師後身・如来使)」という構図が結実し、後の最澄自身が歩むべき「法華經弘宣の如来使」、「使命に生きる法華經具現者」としての生きざまが決定付けられたと考えられる。

最澄の「天台大師後身の自覚、如来使の自覚」は、まさに入唐の時に始まるから、天台山中における天台大師の足跡の巡拝こそは、天台証悟に対する追慕とその後身としての現地体験であったのではなかろうか。

故に、帰国後の一宗開創にあたっては、単なる「法華經宗」の開宗宣言ではなく、直授相承・如来使たる天台大師の法華經解釈に基づく經宗派(釈尊付嘱の法華經)の開創を宣言して「天台法華宗」としたのである。しかもそれは、我国における自身再誕の由来を明かし、自らの使命を公言する決意表明であったと言えよう。

故に、經年度重なる会津の法相徳一法師との法華經をめぐる三一権実・仏性論争においても、法華開頭、大直道、一大事因縁、皆悉成仏を主題として法華經を弘宣し、現前の徳一法師をも例外とせず、遍く衆生済度を致す皆悉成仏の經を敷衍することが、「如来使」としての使命と了知した。結果、最澄はその死の間際に至るまで、実に誠実に、律儀なまでもその使命を全うした「法華經弘通者」であったと言えよう。

つまり、「靈山同聴の天台大師の再誕」としての自覚と、その靈山同聴における釈尊直授相承に基づく「仏出世本懐經＝法華經」の弘通という目的を實踐する「如来使としての使命観」が最澄の宗教心の全てであり、その生涯と行動を規定したのである。それ故に「天台所釈法華之宗」＝「釈迦世尊所立之宗」という文言やそれに基づく論述がその行動の旗印となるのである。更に、生涯に亘る具体例を整序してゆきたい。

キーワード：如来使 靈山同聴 後身